

兵庫県産甲虫類研究史概説(4)*

高橋 寿郎

昭和即ち現代(平成迄)の兵庫県下の昆虫研究は第2次大戦を境として戦前・戦後に別けてみよう。当然昆虫学の発展は大学・各種官公庁が中心となってきたが各地方に出来た昆虫趣味の者達の集い所謂アマチュアの研究機関の発展によって非常な前進がみられ特に関西地方はアマチュア研家が中心となってきたことは注目に価する。かつて江崎悌三博士は“欧州における昆虫学の発達には好事家的なアマチュアが集まって昆虫の研究を始めたことが出発点であるが吾が国のそれは害虫による農業の被害対策として必要に迫られた結果であると……”昆虫学発達の根本が違うことを説明しておられるが(1957)その意味で関西の昆虫の研究と云うものがアマチュアが中心となって推進されたことはヨーロッパ的と云えるかと思う。

大阪の寺西 暢, 戸沢信義, 岩田正俊, 京都の竹内吉蔵, 松岡良弘の諸氏が設立した“関西昆虫学会”は昭和5年から会誌(関西昆虫学会々報, 関西昆虫雑誌)を発行し, 兵庫の昆虫研究者もこれを中心に研究を発表するようになった。

一方県下の学校を中心として“兵庫県博物学会”が結成され会誌の創刊されたのは昭和6年1月(1931)のことである。さらに昭和12年には兵庫県中等教育博物学会が発足, 会誌“博物学雑誌”が発行された。之等の会誌には昆虫の記事は大変少ない。即ち昆虫研究者の県下に少ないことが想像できる。

兵庫県中等博物学雑誌の創刊号には田中 光照氏の“キベリハムシについて”の報文があり(1938)第7号は会長山鳥先生還暦祝賀記念号として433p.の大冊が出版されている。ただ昆虫関係の報文ではあまり見るべきものが出ていない。

当時大阪で活躍していた中林馮次氏を招いて昆虫採集指導を受けていた時代である。兵庫県博物学会々誌の方も昆虫に関する記事は大変少ないが終刊近くになって米谷正司氏とか筆者などが研究発表をした。

むしろ純アマチュアとして当時吾々の智識向上に非常に役立った“昆虫界”(昆虫趣味の会機関誌, 昭和8年創刊)を中心とした住吉の関 公一氏, 六甲の小林桂助氏の活躍がめざましい, 小林桂助氏は鳥の研究家として著名な方であるが当時六甲山を中心とした昆虫調査をしておられた。戦後から現在にかけて再び鳥中心の研究で活躍しておられる(虫の研究, 観察も勿論続けておられ兵庫野鳥の会を主宰しておられる)。関氏も同じく会社に勤務のかたわら昆虫類, 特にカミキリムシの研究をしておられ住吉, 御影を中心として摩耶, 六甲山をふくめた昆虫相の調査・発表, 県下のカミキリムシの目録も発表して

*兵庫県甲虫相資料・295

おられ戦後いち早く“新日本産天牛科目録”を自刊された。多くの標本、文献類をもっておられた（氏は同時に鳥の観察にも力を入れておられ生態写真を中心に色々活躍しておられた）。昭和63年（1939）、米谷正司、沢野芳介氏を幹事として昆虫趣味の会神戸支部を結成その部報第1号を同年4月発行された。その後同支部は感情問題から再編成され幹事に野村 全、谷口和義氏を任命継続され、阪口浩平氏も部員に入っておられた。筆者も入会部会報に報文を発表したり採集会に出掛けたり、関氏のお宅にも何度かお伺いした。米谷氏のお宅にも何度か訪問したが氏は後に標本商のようなことをやっておられた（分譲標本のカatalogを印刷して好事家に送ったりしておられた）。関 公一氏は1969年亡くなられた。後継者がおられないようなので貴重な文献、標本類の散佚が心配であったが標本類は大阪市立自然史博物館へ寄贈そこで保管されている。米谷氏も亡くなられたが標本の行方については詳しいことを知らない。阪口浩平氏も亡くなられた。阪口氏はその頃ハネカクシの分類をやっておられ筆者も同定を御願ひしたことがある。その後ノミの研究をされた（ノミの研究で理学博士の学位を得ておられる）。外国産の昆虫標本の収集家としても良く知られておりそれらを基礎としてまとめられた“世界の昆虫”全6巻（保育社・大阪）は大変な名著である（1979 - 1983）。1983年10月突然に亡くなられた。同博士のコレクションは兵庫県立人と自然の博物館の目玉標本の一つとして県が購入保管されることになった（阪口コレクションは残念ながら日本産、特に兵庫県産の標本が大変少ないと云う欠点がある）。野村 全、谷口（黒佐）和義氏などは現在（1992）でも元気で活躍中である。

戸沢信義氏は昭和37年（1962）昆虫研究50年の御祝をされた県下昆虫研究の大先輩であり蜂の研究家としても知られている。御宅も甲東園にあり県下の昆虫を調べ後輩の指導にあたっておられるが初期の研究の中に箕面の昆虫を調べた“箕面産昆虫目録”（1932）が有名である。氏は関西昆虫学会の指導をされるとともに宝塚昆虫館長として同館報の発行（昭和15年 - 1940、9月創刊）をされ（宝塚昆虫館の出来たのは昭和14年 - 1939、8月）、戦後は神戸生物クラブ顧問として活躍しておられたが1978年には一切の昆虫関係から身を引くと文献、標本を処分された。大変淋しい限りである（標本は大阪市立自然史博物館へ寄贈された）。

学校関係のことはよくわからないが神戸二中（現兵庫高校）に在学していたので二中を中心とした状況を説明してみる。

昭和8年10月10日より16日迄東京上野松坂屋中二階で昆虫趣味の会・読売新聞社共同主催による昆虫展覧会が開催されそれに出品されたものの中に博物研究（三）、兵庫県立神戸中学校博物教室。会報、兵庫県立第二中学校博物同好会。共に鳥居 茂氏出品というのがあり展覧会が昭和8年であるから之等の全誌もその年度の発行なのであろうと思うが筆者はこれ等に就いては詳しく知らない。その後竹中 茂先生の“私と二中”を拝見していると（「かぶとがに」）第8号、p.177 - 178、1978）、先生が生徒達に自由研究として一学期に一題の報告をすることを命じそれ等の内から優秀なものを選んで博物研

究として第一輯～第四輯を発行されたことを知りその表紙と第一頁の写真が紹介された。勿論内容を見ていないので昆虫に関する記事がどのようにあったかわからなかった。筆者が神戸二中へ入学したのが昭和10年でその年竹中 茂先生の手によって博物研究会が設立され会則を定められ（かぶとがに、第8号、p.4）会誌Natureが創刊された（昭和10年4月出版となっている）。この会誌は筆者の手許に9号迄ある（昭和14年7月出版）。これで全部かどうかかわからないがこれ等の中には昆虫に就いての貴重な報告が多くふくまれている。それとその当時二中の博物教室に富田竹二郎氏（1978年時点大阪外国大学タイ・ベトナム語教授、二中24陽会）が書かれた“再度山の昆虫A、B”があった。赤い表紙の本で原稿用紙に書かれたもので製本してあった。大変貴重な資料として何回か読ませて頂いた。当時このような私家本をこしらえることがわりとあったようで筆者も原稿用紙にまとめたものを“神戸烏原甲虫誌”（1940），“神戸烏原甲虫誌・改訂版”（1941）としてそれぞれ製本現在も大事に保管している。

当時兵庫県立の中学校は1～3中とあったので夫々の学校にも博物研究会はあったであろうと思われるが学校が違うので資料を見ることが出来ない。ただ1941年兵庫県立第一神戸中学校報国団文化部博物学会から“一中付近の昆虫”と題する単行本（40p.）が出版されて筆者も現在所有している。いわゆる摩耶山の昆虫類で蝶を山田敬太、甲虫を増田 猛、橋本直也氏が担当しておられる。当時のようすがわかり貴重である。

また神戸二中の同好者が集って神戸博物同好会を結成その会誌 Nature No.1（1939年3月）、同会会報 No.1-5（1940）の出版、さらには1940年博物研究会・動物愛好会・園芸部共同による冊子「観察」を出版それぞれに昆虫に関する報文が発表されており筆者も何篇かのコガネムシを中心として甲虫の報文を発表している。

甲南高等学校博物研究会から“博物研究”と云うのが発行されている。詳しいことはわからないが現在第3号が手許にあり（1938刊）谷口和義氏が貴重な報文を発表しておられる。

1939年（昭和14年）神戸大丸博物売場が事務所で神戸博物同好会というのが設立された。

紅谷進二・川崎 正・河原 巖先生などが顧問の中に見られ相談役に“虫のおじさん”中林馮次氏の名も見られる。会誌“博物趣味”が同年5月創刊され筆者の手許にはVol.1, No.7迄の内5冊しかない。いずれも案内記のようなものである。この会が戦後の“神戸生物クラブ”へと発展する。

終戦後いち早く兵庫県生物学会が森 為三博士を会長に1947年創立された。戦前の兵庫県博物学会に変わるものとしてスタートしたものでその研究機関誌「兵庫生物」は翌1948年に創刊されこの会誌は現在迄続いているが生物学会そのものが高校の先生が中心であって県下に昆虫を研究する層が植物に比べて大変少なくこの会誌上に昆虫の報文が発表されることが大変少ないように思われる。それでも蝶の山本広一、吉阪道雄氏（共に現在では活動されていない）、岩村 巖氏、蛾、カメムシその他の水上郡の昆虫の山本義丸氏そして甲虫の筆者等による報文が比較的多く発表されたものであるが最近はや

び時代替りと云うか昆虫に関する発表論文も少なくなって来たようである。ただ県下の生物研究学会としては唯一のものであるので貴重である。

戦後県下にも農大が出来そこには蜂の生態の研究で有名な岩田久二雄博士、ハバチの権威 奥谷禎一博士、シギアブ研究の永富 昭博士、ハチの生態研究の宮本セツ博士と多士済々でいづれも膜翅、双翅目の研究者である。明石にはゴミムシ、オサムシ類の研究者として知られている石田 裕氏がおられた。農大はその後国立に昇格神戸大学農学部となる。今迄のべた諸先生方は現在ではほとんど停年退職されている。現在の神大農学部は桃井節也博士（教授）、内藤親彦博士（教授）で共に膜翅目専門の方である。

農大時代農大生の同好者湯浅浩史、辻 啓介氏等が中心となって扇の山の調査を主体に“兵庫農大生物研究部々誌”を発行しておられた。これらの方々で現在も昆虫の研究を続けておられるのは神大の内藤博士以外おられないように思われる。柏原では当時柏原高校で教鞭をとっておられた山本義丸氏（この方は東京高師卒業で蛾の研究者で昆虫学者のセミプロであり後大阪教育大学付属高校に転職されたが現在停年退職して自由の身で蛾の研究をしておられる）が中心となって氷上郡下の昆虫相を調べられ実に立派な“氷上郡産昆虫目録”（1958）を発行約3,000種の氷上郡の昆虫が記録されている。山本氏自身は蛾の研究で有名な方であるがその意志を引き継いだ高橋 匡氏が中心となり柏原高校生物研究会を指導その会誌も毎年発行されて（会誌名 Natura）氷上郡のみならず氷ノ山を中心とした研究をされ筆者も柏原高校で所蔵標本を見せて頂いたが実に立派な管理状態であり山本、高橋両氏の御好意で多くの標本を御恵与頂いているし目録作成にはコガネムシ科の同定をさせて頂いた。高橋氏は後出石高校に転職され1963年には“出石郡昆虫目録”を発表になっておりその後さらに豊岡高等学校に変わられそこでも“豊岡高等学校昆虫標本目録（第1～5報）（1975～1978）”を発表その後も但馬の昆虫相調査を精力的にやっておられたが現在は停年退職されて研究を続けておられる（現在近大付属豊岡高校で教鞭をとっておられる）

学校関係では1950年に有馬高校普通科生物教室から発行された“有馬郡生物誌”があり兵庫農大の紀要もある。又前記農大生物研究部々誌、長田高校生物部の“Shida”、1号限りであるが“Tritoma”（神戸昆虫同好会）、甲陵中学校生物部の“甲陵生物”というのがあった。

西村 登氏は関宮中学校、兎塚中学校教諭をしておられたが現在は退職しておられる。1984年ヒゲナガカワトビケラの生態研究その他で理学博士の学位を取得されている。単行書に、論文に、テレビに新聞等々にいろいろ発表しておられ水棲昆虫の研究を続けておられ兵庫陸水生物研究会を主宰しておられる。

猪股涼一、岡本 清の両氏は多可郡西脇高校で教鞭をとっておられ西脇市を中心として昆虫相調査につとめられその数多くの標本は当地区が極めて立派な昆虫相を呈することの証明となり文献としてはほとんど発表されていないので一般に知られていないのが残念である（西脇自然同好会というのがある）

その会報が発行されていたがどの程度継続されていたのか詳しいことがわからない。猪股氏はその後御影高校、川西高校、報徳学園高校教諭を歴任の後停年退職された。1984年ハバチの研究で農学博士の学位を取得され現在もハバチの研究を続けておられる。岡本氏も停年退職されたが蛾の研究を続けておられる（ミクロの蛾専門、氏は東京農大卒業）。

終戦直後大阪において林 匡夫、大倉正文、後藤光男氏等により近畿甲虫同好会が設立されその会報の創刊号が昭和21年1月（1946）発行された。一方林 匡夫、大林一夫氏等による虫の友の会も大阪に設立され基処で会誌「昆虫学評論」の創刊号が1948年に出版された。その後この両会は合併され近畿甲虫同好会としてその機関誌「昆虫学評論」第5巻、第1号の出版されたのが1950年である。さらにこの会が日本甲虫学会と改名されたのは創立十五周年にあたる昭和35年（1960）である。機関誌「昆虫学評論」は現在でも年2回定期に発行され1993年で第48巻と老舗の学会となっている。そもそも中根猛彦博士とか林 匡夫博士を中心とした半アマチュア的虫好きの集まりでスタートしたと思われるのであるが今では一流の学会になっている。設立当初から世話をしてくられた大倉正文氏が神戸に住んでおられる関係で（事務所も大倉氏方）兵庫県にとっても大変関係のある学会となっている。ただ最近では次第に新種記載の論文中心の会誌になってきてアマチュアにとってはいささか勝手の違う会になってしまった感無きにもあらずである。

昭和31年（1956）秋第11回国民体育大会が兵庫県で開催されそれを記念し兵庫県生物学会並びに神戸新聞社企画のもとに神戸新聞会館で“兵庫生物展”が開かれこれには蝶の山本広一、吉阪道雄氏、蛾の山本義丸氏、甲虫の筆者が出品、それを記念して“兵庫県生物誌”が出版された。

その後昭和34年（1959）には六月社から“国立公園 六甲の自然”を室井 綽博士を中心に発行、筆者も甲虫関係を担当した。また本書のジュニア版が出版された（国立公園、ジュニア六甲、1961）更に“のじぎく文庫”から“兵庫の自然”（1960）、“読・兵庫の自然”（1969）が出版され“明石の自然”も1963年に出版された。

戦前神戸大丸を中心に神戸博物同好会が結成されていたが中断、戦後“神戸生物クラブ”として出発した。こんどは会誌の発行は無いが毎年4～11月の間月1乃至2回の採集・観察指導会を小・中学生を対象に開催している。既に30数年続いている。8月終わりには鑑定会、9月に展覧会も恒例行事となっている。顧問として昆虫は戸沢信義、大倉正文、岡本 清、山本広一、猪股涼一、高橋寿郎が世話をしてきたが現在残っているのは大倉正文氏1人である（1992年現在）。当然若い顧問が就任しておられ世代交替が行われている。昭和61年（1986）には30周年記念誌の出版を見たがこれは回顧録のようなものである。

昭和30年（1955）には大倉正文・石田 裕氏等が中心となって“神戸昆虫同好会”を結成その後現在迄月一回の例会（主として採集会・冬季の談話会）を確実にやっている。この会は機関誌を発行しな

いので一般にはあまり知られていない。採集会の方もわりと大阪とか奈良とかの方面が多いように思われる（平成元年－1989－7月の例会が第413回例会）平成4年度（1992）からは大倉正文氏の健康の関係から例会の案内を頂いていない。大倉正文氏は前に紹介したように日本昆虫学会の中心指導者でオサムシ、水棲甲虫の研究者として知られており御宅も六甲山麓にあり県下昆虫相究明に努力しておられる。西宮には虫同友会が結成されその会誌“MDK News”が昭和25年（1947）から発行された。昭和47年11月には創立満25周年記念号が発行された（Vol.24, No.1, 1972）兵庫県の昆虫に関する報文が割合多く発表されている。例会も開催され昭和46年（1971）11月が第181回例会となっている。ただ残念ながら本会も時代の流れで昭和49年（1974）には転換期になり中断されたが50年から引き続き若林守男氏が中心となって継続されることになったがうまくゆかず現在は活動もしていないし会誌の発行もない。

昭和41年（1966）兵庫県の“虫や”の連絡の機関として“兵庫県むしの会”奥谷禎一博士、県植物防疫の仲田氏、農試病虫部 宇部部長、山口氏、猪股、大倉諸氏と筆者達が発起人として発足“兵庫県虫の会々報”も2号迄発行されたが世話人がそれぞれ多忙過ぎて会の運営がうまく出来ず自然消滅の形になってしまったのは残念である。

昭和38年（1963）には室井 緯博士のお世話で市立明石天文科学館講堂で“世界のきれいな虫と貝とかたつむり展”（故古川博二先生と共同出品）を7月21日～8月31日間開催、昆虫標本46箱と“昆虫切手”を出品、解説文並びに神戸新聞誌上（8月1日～8月19日号）に“ママはコン虫学者”と題して県下の昆虫の解説を発表した。翌39年（1964）には同じ場所で“県下特産生物展”が開催され、それにも出品した。

昭和46年（1971）5月佐用郡南光町船越の瑠璃寺境内に県教委により県立昆虫館が設立されて県出身で東京にて標本商をやりながら平山博物館を設立、昆虫研究普及に功績のあった故平山修次郎氏の標本の一部が寄贈（購入）されたりして内容の充実をはかっている。現在は内海功一氏が館長として管理運営をしておられる。平山氏の標本その他昆虫標本の一部は同じ県立の人と自然の博物館へ移館する計画があるとも聞いている。伊丹市にも伊丹市立博物館があり、かつて阪口浩平博士が協議会委員として昆虫に関しては展示の指導などしておられたが元来土地柄酒蔵関係の資料が多く、昆虫関係資料は力が入っていない博物館である。平成2年（1990）伊丹昆陽池畔に伊丹市昆虫館が開館になった（館長は山手女子短大学長を停年退職された田中 梓先生が就任された）。

1967年には“氷の山・後山・那岐山国定公園健補地学術報告”が出版されたが昆虫の専門家が加わっておらず、昆虫に関しては参考にならない報文となっている。県自然保護協会というのも設立され講演その他の活動はおこなわれており1972年に“扇の山周辺の動物（I）”が発表された。これには奥谷禎一博士、辻 啓介氏による蜂、蝶、甲虫についての報文の発表がある。その後“兵庫県の自然”と題す

る機関誌が発行されているが昆虫に関する記事はほとんどなく学術的な報文誌でないのが残念である。

“西宮市の生物相”が西宮市自然保護および利用に関する基礎調査報告書として出版された。西宮自然保護協会からは「西宮の自然, 1976」「続・西宮の自然, 1980」の2冊が出版された。若干の昆虫関係の報文が含まれている。また“猪名川旧河川敷の昆虫”も出版されている。

神戸新聞社では兵庫探検自然編が昭和46年9月よりとりあげられて昆虫に関しても珍しい種について解説が試みられた。キベリハムシは兵庫県特産種として筆者の飼育中のものを中心に紹介された。ギフチョウ、ナガサキアゲハ、ヒメハルゼミ等々がとりあげられている（昭和48年11月完了, 昭和49年単行書として出版）。

自然破壊のすすむ中で兵庫県にどのような昆虫が生息しているか？これがわからなければ自然保護と云っても役立つないと県下のファウナをまとめることを目的に奥谷禎一博士を顧問に辻 啓介氏が中心となって兵庫昆虫同好会が設立された。そしてその会誌“きべりはむし”が1972年に発行され現在年2回の会誌が発行され県下のファウナに関する貴重な報文が発表されている。1978年から実質運営は筆者の手でやっている（1994年 Vol.22）。

淡路島には淡路昆虫同好会があり、その会誌“Parnassius”が定期的に発行されて同島のファウナ解明に努めておられる。

姫路に姫路昆虫同好会が1976年に創設された。会誌“てんとうむし”も10号までは出版されたが、それ以後の出版が見られない、活動もやや下火になっているのではと考えられる（連絡誌の発行、例会などは相坂耕作氏によってつづいている。1994年現在）。

但馬虫の会も1977年に設立され会誌“IRATSUME”も現在（1993）17号まで発行されている。こちらも当初から見るとやや活動がにぶって来たように思われる。

甲陽学院高校生物部から“生物甲陽”というのも発行されているが（2年に1回）兵庫県下の昆虫に関する寄与はあまりなさそうである。

1968年3月31日当時大学生だった人々を中心となって能勢地方の昆虫相およびその生態の調査・解明を主要活動のひとつとして大阪昆虫同好会を結成された。能勢地方であるから兵庫県もある程度ふくまれる。その後会の事務所も神戸に移され会誌Crudeの発行も兵庫県下で行われている。また筆者を始めとして兵庫県関係の報文も多く発表されている。したがって兵庫県にとって忘れることの出来ない同好会といえる（会誌Crudeは1993年でNo.38が出版されている）。

神戸再度山の市立教育植物園に“自然昆虫園”が昭和47年（1952）5月オープンした。カブト虫、ホタル、蝶の飼育を実施生きたこれ等の虫を市民に見せようと云うもの。勿論網等持込み厳禁である。この“自然昆虫園”も後に森林植物園に統合された。森林植物園は紀元2600年（1940）記念事業として昭和15年に着工されたものであり昭和59年5月に森林展示館がその中に建設された。筆者はそれを記念

して外国産蝶を主体にドイツ型大箱60箱の昆虫標本を寄贈した(1990年五十年の歩み・森林目録の立派な2冊が送られて来た)。

1972年頃から遅まきながら自然開発, 地域開発にともなう種々の問題がとりあげられ, それに関連して特定地域の生物相の調査があらはれ始めた. 尤もこのような調査が開発にどのように影響を及ぼしているかと云えば全く何等の利用もされていない点お役所仕事の表面を糊塗した一行事に過ぎないと考えられるが違った意味で昆虫相の思いがけない収穫があり参考になることが多い. 一般にゴルフ場建設等の環境調査依頼などにしても計画が出来てしまった後で官公庁の許可を得るための書類上必要からの調査依頼であり計画以前に調査してその方法がいいかどうか検討するといった事前調査など全く無い点は環境調査を無視しているのか軽視しているあらわれであると考えられる. 自然保護と口先で云っても権限の無い者たちによる保護対策など全く意味が無いし, まして罰則が無い取締は全く無意味である. ただこういった調査のお陰で, いくらかのファウナがはっきりしたことは事実である. 例えば前掲“西宮市の生物相”(1972), 愛媛大学農学部昆虫学研究室石原 保博士を中心とした“本四架橋ルートの島々の昆虫相”(1973)とか西村 登博士による“加古川水系の底生動物相とその現存量ならびにそれに基づく生物学的水質判定結果”(1974)のような異色の研究があらはれたりしている.

同じように“東中国山地自然環境調査”の一つとしてその報告書が奥谷禎一博士の指導の下に兵庫昆虫同好会の方々との協力で“中国山脈東端の昆虫相”をまとめて出版された(1974). また兵庫県神崎郡大河内地点自然環境実態調査報告書が1978年に出版され筆者も甲虫類について執筆した.

啓蒙書ではあるが西宮自然保護協会が“西宮の自然”を発刊(1978)直接昆虫に関係は薄い岡村はた博士の努力で兵庫県立兵庫高等学校創立七十周年生物研究部記念誌が出版された(1978)(同じようなものに神戸女学院百周年記念“岡田山の自然”がある. 筆者も“六甲山の昆虫たち”を出版(のじぎく文庫, 1981), 最近では坂根耕作氏の“ひめじの昆虫・I”(ひめじ花と緑の協会刊, 1987), “播磨の昆虫”(のじぎく文庫, 1988)が発行されている. 西村 登博士が昆虫を担当して村岡教育委員会から“村岡の自然と遊ぶ”(1986)も出版された. 淡路島からは“三熊山の自然, 第1集”(1979), “論鶴羽山の自然”(1980), “煙島の自然”(1982), “三熊山の自然, 第2集”(1986)などの出版もある. 1990年には兵庫県生物学会但馬支部の方々による“但馬の自然”(のじぎく文庫)が出版された.

1963年には“兵庫県大百科事典, 上・下巻”が神戸新聞出版センターより出版昆虫は奥谷禎一博士と筆者が執筆した. 1992年からは東 正雄先生が中心となって“宝塚の昆虫”シリーズの出版が始まった.

昭和63年(1988)8月かねてからの紆余曲折を経て三田市弥生が丘深田公園に「21世紀公園都市博覧会」のテーマ館(ホロンピア館)を活用して県自然系博物館建設が発表され正式名“県立人と自然の博物館”に決定平成4年(1992)10月開館された. これからは県下の昆虫研究の中心的存在として

大いに発展されることを望むものである。

筆者も兵庫県産甲虫相完成を目指して1938年から調査を始め現在572編の報文を発表した（1993年末で昆虫以外の報文も含む）。また“兵庫県産甲虫類に関する文献目録”を自刊したりしている（1975, 1981, 1984, 1994）（1992年までに集めた県産甲虫, 異翅目標本は1993年2月県立人と自然の博物館へ寄贈した）。

兵庫県の甲虫相もほぼその概要がわかってきた段階である（尤も部分的には手つかずのグループがあったり, 県下での未調査地域もあるが-), これをどのような形式で, どのような方法で出版するか目下見当もつかない。昆虫全般ということになると恐らく組織的な調査が出来ない限り無理のようである。

自然破壊による環境変化は著しく次々と変わる昆虫相・甲虫相をどの時点でどのような形式でおさえるのか大きな問題になると考えられる。

(1994年3月)

六甲山系を中心とした神戸並びにその近傍の甲虫相*

高橋 寿郎

はじめに：

東播磨の甲虫相・西播磨の甲虫相につづいてここに六甲山系を中心とした神戸並びにその近傍の甲虫相をまとめて見ることにした。

そもそも兵庫県の甲虫相のまとめはまだまだ前途遼遠で組織的な調査が全く出来ていないので手つかずのグループが多くありこれからの問題として残るものである。ただ一般的には川辺郡猪名川町, 川西市, 能勢を仲田元亮氏による“能勢の昆虫（甲虫）”（1970, 1978, 1982）としてまとめられ宝塚市のまとめも東 正雄氏等により公表されており（1992, 1993）, 氷上郡は山本義丸氏によるまとめがあり（1958, 1962）, 但馬地方は高橋 匡氏がとりまとめた出石地方（1963, 1965）, 豊岡を中心として氷の山, 扇の山等の山岳地帯の調査（1975, 1975, 1976, 1978 etc）, そして現在も但馬むしの会を中心とした調査が続けられている。淡路島の甲虫相も不十分ではあるが最近発表させて頂いた（1994）, これ等の地域を除いたものまとめが始めに記した“東播磨の甲虫相, 西播磨の甲虫相”（1993, 1994）

*兵庫県甲虫相資料・296